慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのウキリアム・モリス（三）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1301(89)- 1315(103)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のものに就いて批評を加へる必要があると考へるから、暫くアシュレー氏の論述を離れて説明したいと思ふ。

（註一）　拙著「經濟的文化と哲學」第三篇參照。但し本書に於ける論述は更に以下本論文に於いて述ぶるところに依つて補足さるべきものである。

（註二）　アキール・ロリア及びラムプレヒト兩氏に就いては唯物史觀考察後簡單に論及したいと思ふから、敢てこゝに詳論しない。

（註三）　現代に於いて經濟史の考察が益々重要視され、且つ唯物史觀がそれと共に重きをなした點に就いては、アシュレー教授がそれと共に重きをなした點に就いては、アシュレー教授が同じく此の論文の前の部分で論及した一節が參照に價すると思ふから、こゝに紹介して置く。

「意識的に無意識的に各時代は過去の研究に於いて特種の興味を以つて見るように束縛される。即ち何等かの理由に依つて現在に於いて最も興味ある人生の狀態若しくは方面に就いて束縛される。……

「三世紀の間、人心は神學的論辯に依る一つの特種の方向に向いて居た。而してそれに依つて Bellarmin から Mosheim に至る教會の職業的歷史家に依つて、莫大なる博識の貯藏が蒐集された。權威書の多くの集成がベネディクト派及び其の他に依つて印刷された。而して更に意義のあることは各大學者 Grotius や Casaubon のやうな人が必然的に相當の教會的歷史家であつたことである。今日の吾人にとつて斯くの如き態度が如何に無關係になつたかは、吾人が教會史を神學科に祭り込む流行的傾向及び神學的定義が人間の行動に對して嚴格な影響を及ぼした信仰を區別せんと努力する際、多くの大學教師が遭遇する困難を顧る時、明白である。又佛蘭西革命に始まる憲法作成時代は吾人に法制史家を與へた。一八三〇年及び一八三二年以外の年では Guizot, Hallam, Macaulay は説明することが出來ない。廿一世紀に於ける研究者は心の中に三人のナポレオンを有するにあらずば、Mommsen の「羅馬史」の見地を評價するのに十分でないことを發見するだらう。而してビクトリヤ時代に於ける英國の黨派制度が如何であつたかと云ふことを忘れたならば、Mr. Grote の希臘史を完全に了解し得ないだらう。嚴密に同樣に現代經濟問題の切迫が經濟史の全文獻を生ずる、否すでに生じ始めたことは確實である。現存社會狀態に對する社會主義者の批判が最初の中は彼等の論點を支持する議論の爲めに歷史の方に向けられた。社會的事件のより保守的な研究者は重べられたる事實の敍述を檢査するのに束縛を感じた。而して一は勞働問題、農業問題、關稅問題及び貨幣問題の流布の爲めに、一は政治運動の民主化、人道的倫理學の爲めに、一般の歷史家は潮流に沿ふて進んで居た。Green の "Short History of the English People." の序文は現代の典型的歷史家の信條の告白であるそれに就いて最も無意味のものと云へないのは一八七四年と云ふ其の公刊日附である。」（"Surveys"; p.23-4）

（註四）　アシュレー氏は經濟的必至論者を論破するには定命主義を十分に論ずる必要ありとし、定命主義に對する批判として James 教授の論文 "The Dilemma of Determinism" （"The Will to believe." 中にあり）を讀者に奬めて居る。

（未完）

社會思想家としての ウヰリアム・モリス（三）

加田哲二

六

建築の實際的修得を捨てた Morris は、その繪畫の師として Rossetti に就いた。Rossetti は魅力ある人格を以て、多くの人々を惹きつけた。彼は何人も彼の衷に詩を持つてゐる人は繪を書かなければならないと信じた。さうして英國の詩壇は、その長い光榮ある歷史を經過して今やその終末期に臨んでゐる。然るに英國の繪畫は、その黎明期にあつて、その黎明の藝術を育くみ、成長さすことを以て、Rossetti は彼の使命としたのである。この信念を以て Rossetti は多くの青年に説いた。Jones も Morris もこの信念に動かされたのである。Rossetti は千八百五十七年の二月に William Bell Scott に宛てた書翰において、次のやうに彼等を評した「牛津並に劍橋雜誌の計畫者である二人の青年が近頃 Oxford から London に來て、今では自分の大邊親しい友達になつた。彼等の名前は Morris と Jones とである。彼等は普通あの大學を出た者が取る道を採らずに、藝術家になつた。Jones の素畫は完全と想像の巧緻との見本で、恐らく Albert Dürer の最も美しい作品を除いては、之

に比較するものはないであらう。Morris は未だ繪畫を始めないが、同じやうな才能を持つてゐると思ふ。彼は既に眞に驚異すべき程の詩を書いた」。Rossetti は彼等兩人の才能について斯くの如く評したが、この批評は洵に人を欺かなかつた。

Morris はこの春中繪畫の練習に餘念がなかつた。此頃に至つて彼は驚くべき圖案の才能を現はし、さうして中世紀藝術研究の結果として色彩に對して極めて正確な判斷を持つてゐた。殊に裝飾に對して然りである。Rossetti は千八百五十六年の基督降誕祭の數日前に書いてゐる。「この種の裝飾においては、彼は現代の何人よりも優れてゐる」と。けれども Morris は動物の形態を描くのには、少しも上達することがなかつた。また人間を描くこともその得意とするところではない。このことは後に到るまでも續いて、動物並に人間を描く場合には、外の人が助力をするのを常とした。即ち壁紙（ウオールペーパー）の圖案の中の動物は Webb により、綴錦（タペストリー）における人物は Burne-Jones が描いたのである。然し乍ら Morris は懸命に練習を續けて、その始めての繪畫を畫いた。それはその主題を Morte d'Arthur の中から取つたものである。

かくする中に、千八百五十七年の長い休暇の始めに Rossetti はその友人で建築家である Benjamin Woodward を訪問した。この訪問に Morris も同行した。Woodward は當時 Oxford 大學のために、大學博物館の建築を引受けてゐた。その傍彼は Union Society のために討論室を建てゐたが、この時恰度その屋根が出來上つたところであつた。そこで天井その他の所に、テンペラ（tempera）で繪を畫くこととなつて、この仕事を Rossetti が引受けることとなつた。Morris と Jones とは、この仕事に參加することとなり、彼等はすべてのことを捨てて、この事業に沒頭するやうになつた。Rossetti は、直ちに壁畫の計畫を立てた。彼は Morte d'Arthur から題材を取り、その上の天井は花模樣にすることにした。Morris と Jones との外、Arthur Hughes, Spencer Stanhope, Val Prinsep, Hungerford Pollen がこの仕事に加入することとなつた。Madox Brown は加入を勸められたが拒絕してしまつた。これ等の人々が Rossetti の監督の下に協働することになつたのである。

Morriss は何時ものやうな精力を以て、その仕事に從事した。彼は一番始めに素畫を畫きさうして、最初に繪を仕上げた。彼の繪は "How Sir Palomydes loved La Belle Iseult with exceeding great love out of measure, and how she loved not him again but rather Sir Tristram." と題するものであつた。

この藝術的製作の間にあつて、Morris は尙ほ詩作にも耽けつたのである。さうして彼の最初の詩集である "The Defence of Guenevere and other poems" は千八百五十八年の始めに刊行された。この詩集はあまりに世間の視聽を惹くことがなく、その賣行もあまりに顯著なものでなかつたことは、その第一版が千八百七十一年に到つても尙ほ在庫品としてあつたことが證明してゐる。けれどもその詩集に集められた詩は彼の詩の中で最も美しいもので、之を讀んだ少數の人々には可成に强い影響を及ぼしたのである。

この詩集を出した外に、まだ一つの事件がこの Oxford における藝術的製作の間に起つた。それは彼が Miss Jane Burden と相識つたことである。千八百五十七年の長い休暇も終りに近

づゝ頃、Union Society の藝術的創造に從事してゐた人々は、Oxford の小さな劇場へ行つた。彼等の後に Holywell Street の Robert Burden の二人の娘が座つてゐた。この二人の娘の中、姉が非常に美しかつたので彼等の注意を惹いた。殊に Rossetti は、その美を稱へた。彼等は彼女と知り合ひになり、彼女は、Rossetti その他の人々のモデルとして立つことになつた。Morris は彼女の美に何處までも惹かれて行つた。さうして彼の詩集が出ると間もなく、兩人は婚約を結んだ。さうして千八百五十九年四月二十六日の火曜日に William Morris と Jane Burden とは、Oxford の St. Michael 教會で結婚式を擧げた。今は僧職に就いて Lambeth の St. Mary 教會で牧師補をしてゐる Dixon は式を擧行するために來り、Faulkner は介添人となり、Burne-Jones その他の人々が列席した。(Mackail, Life, I. pp. 112-142)

Paris, Belgium, Rhine, Basle への六週間の旅行の後に Morris 夫妻は London に歸來して、Great Ormond Street に室を求めた。さうして新しい家の出來るまでこゝに落ちつくことになつた。Philip Webb は恰度この時分 Street の事務所を辭してゐたので、新しい家は彼の手によつて建てられることとなつた。その家は彼にとつては、その手腕を試むべきものであつた。Mackail の云ふやうに「家屋の建築とその裝飾とに關するその所有者並に建築家の學說が實際に行はれるのであつた。その計畫とその細目とは二人の共同の發明であつた」(Life, I. p. 143) 自分の考へ通りの家を建てると云ふ考へは、暫らく以前から Morris の頭にあつたことである。彼は家をたゞ住むところとしてのみ求めたのではない。彼はそを彼の藝術的活働の中心點としてまたその背景として求めたのである。

Morris は地を North Kent Line の Abbey Wood にトした。彼はこの地の普通Bexley Heath として知られてゐる高臺に果樹園と牧場とを買つた。こゝに彼の家が建てられたのである。それはL型の二階建で、屋根は赤い瓦で葺かれた。(この家のことを「赤い家」Red House と呼んだのは、この屋根の赤かつたことに歸因してゐる。)家の外形が出來たときに、一つの問題が起つた。それは室內裝飾の問題である。Morris の求めるやうな藝術的の家具は、市場において求めることは出來なかつた。テーブルも寢臺も椅子も、また壁紙も——多くの室內裝飾品が林檎の木の間に建てられた美しい家に適するものを發見することが出來なかつた。そこで多くの家具は Webb が設計して、彼の監督の下に作られることになつた。かくて「赤い家」は千八百六十年の晩夏に至つて、竣成の運びとなつた。林檎の林の間に赤い瓦の家は美しく立つて、秋の夜には、開いてゐる窓から林檎が落ち込んだりした。

あらゆることに熱心である Morris は室內裝飾品の作製においてまた一つの興味を見出した。彼は室內裝飾品の市場において藝術的製品のなきことを慨歎し、一つには自己の製作の喜悅を味ふがために、工藝へと向ふに至つた。Morris, Marshall, Faulkner & Co. の設立が即ち是である。この事業は、この會社の解散される少し前に、彼が Naworth から Mrs. Howard へ與へた書翰において「醜惡と野卑に對して、盲目であることは惡いことだ」と云つた精神の發露と見て差支ない。(Mackail, op. cit. p. 314) かくて嘗て Oxford において僧院を建てやうとし

た Morris の夢想は仕事場となつて現はれ、その「同胞」は會社法の適用の下に會社となつて現はれたのである。

Morris & Co. は何人の創意で出來たかと云ふ點になると、それは餘りに明瞭ではない。そは友人達の談笑の間に議が熟して來たのである。けれどもその計畫の大部分は Madox Brown に負ふところが甚だ多い。Rossetti もその計畫者として甚だ重要な地位にゐる。彼は詩人で理想主義者であるに拘らず、甚だ顯著なる實際家としての手腕を持つてゐた。この外會社の事業に參加したものに、Burne-Jones, Madox Brown, Philip Webb, Faulkner, Peter Paul Marshall があり、後に至つては、Arthur Hughes がある。かくて會社は千八百六十一年四月に設立された。さうして Morris と Faulkner とが主として事務を執ることになつた。Red Lion Square の會社には、仕事が殖えるに從つて十二人の大人小供が仕事に來た。職工長の George Campfield は硝子畫工であつて、Great Ormond Street の Working Men's College の夜學生であつたのを Morris に見出されたのである。

かくて會社の事業は開始せられたのであるがその資本は各社員が一磅宛出資し、Leyton の Morris 夫人から百磅の資金を借入れて、第一年の事務は開始された。さうして千八百六十二年には、各社員に十九磅づゝの出資を促し、拂込濟の資本金を百四十磅とし、この額は會社解散のときに至るまで增加されなかつた。この外 Morris 並に彼の母から數百磅の資金が出てゐた。

會社は先づ會社の事業の目的を說明した趣意書を出した。その趣意書は極めてよくこの會社の內容並に目的を說明したものである。

「英國建築家の努力によつて、この國における裝飾藝術の發達は、著名なる藝術家が、その精力を之に費すことが望ましい點に達してゐる。裝飾藝術に成功した特殊の例證は疑ひもなく揭げることが出來る。けれどもこの種の企圖は今日迄のところでは、甚だ幼稚であり、斷片的であると云ふことが一般に感ぜられてゐる。……

上記の藝術家達（morris 等八名）は、その協働によつて、この困難を除去しやうと欲する。その會員の間には種々なる才能を有するものがあるから、各種の裝飾即ち壁の裝飾や繪畫、その他藝術的に美なるものならば、何ものでも企てることが出來るであらう。また斯くの如き協働によつて始めて、藝術家の創作の最大量と、さうして不斷の監督とが最小の費用を以て確保することが出來、然もその製作品は、單獨の藝術家が普通の方法で從事する場合よりも、必然的に完全なものであらうことを豫期する。

是等の藝術家は、多年深くすべての國並に時代の裝飾藝術の研究に從事してゐるので、眞純にして美しい製作物が生產せられ、且つ之が得られる一の場所の缺乏を多くの人々よりは一層深く感じてゐる。故に彼等は下記のものを、彼等自身により、彼等の監督の下に生產するために一の會社を設立した。

一、住宅、敎會または公會堂に用ゐる繪畫、模樣または單なる色の配合による壁の裝飾。

二、建築に應用すべき彫刻一般。

三、スティンド・グラス、殊に壁の裝飾と調和すべきもの。

四、すべての種類の金屬細工。寶玉細工をも

含む。

五、家具。この項目にはすべての種類の刺繍、皮革製作、同種の材料による裝飾製作品、其他家庭用として必要なるあらゆる製品。

是等の種類の製作は、すべて實務的方法により製作せられ、評價せられると云ふことを附け加へて置く必要がある。さうして吾々はよき裝飾――そは費用において奢侈と云ふよりは、寧ろ趣味においての奢侈を意味する――は、一般に想像されてゐるよりも、より廉價だと云ふことを信じてゐる。」(Mackail Life, I. pp. 155-156)

斯くの如くにして始められた會社の事業は先づその需要を教會から得た。教會の裝飾と云ふことが、この會社の第一の事業であつた。この事業から段々に一般の需要へと擴張されて行つたのである。第一年目における會社の事業の進展は、Faulkner が千八百六十二年四月に、Red Lion Square から Price に宛てた書翰の中に記されてゐる「基督降誕祭から自分は忙しくなつた。自分は今技師としての業務と Red Lion Square の業務とで多忙なのだ。……スティンド・グラスと一般裝飾の方は非常に繁昌してゐるので、私は技師を止めて、それに專心にならうと決心した。だから一二週間經つと Topsy は專心に製作の藝術的方面を擔當し、自分は業務監督になるだらう。……吾々の會社は、今大博覽會へ出品し得る位の權威を持つてゐる。吾々は既に博覽會へ數種のスティンド・グラスを送り、また數種の家具を送らうとしてゐる。是等のものは、多くの觀覽者の賞讃を得るであらう。……」(Mackail, Life, I. pp. 161-162) Morris & Co. の事業は斯くの如くして段々と發展して行つた。D. G. Rossetti もその書翰において商會のことについて記してゐる。「初めから商會は裝飾材料で必要なものは何でも製作した。建築上の補助材料、家具、毛氈、刺繍、スティンド・グラス、壁紙等がこれである。品物は一流のもので、技術と製作とは秀れており、價格は高かつた。……諸君は商會の理想通り作られたものを買ふか、さもなければ之を買はずに濟ますより外に致方がない。……そこには何の妥協もなかつた。Morris は先輩の組合員として、規定を作り、そのすべての顧客は之に服從しなければならなかつた。」("D. G. Rossetti: His Family Letters." With a Memoir by W. M. Rossetti. Vol. I. p. 219, quated by Mrs. Townshend, William Morris. p. 6-7) この Rossetti の書翰を引用した後に、Townshend 夫人は次のやうに書いてゐる。「私達はここで、其の初期の努力によつて遂に財政的の成功に達するまでの、初めは Queen's Square で、後には Merton で行はれた多くの仕事の面白い物語を迹つてゐる譯には行かない。その仕事において Morris は管理者であつた許りでなく、職工長であつた。さうしてすべての人に藝術家の識見と工匠の熟練とを與へた。彼特有の忍耐と努力――これ等のものが彼の子供らしい熱情と結合した。モリスの爲した仕事の記述だけでも面白い。壁紙と光澤附更紗とに圖案をつけ、其の印刷を工夫し、染色桶を見守り、織機で働き、今は失はれた毛氈織の技術の復興に時日を費したことを私達は知つてゐる。」(Ibid. p. 7) 彼は働いた。後に彼の社會主義の根底に横つてゐる理想即ち「人は其の全心を其の仕事に打ち込まなければならない。さうして其の仕事は彼の愛するやうなものでなければならない」(Ibid. p. 8) と云ふ理想

をこゝに實現したのである。言葉を換へて云へば、彼は中世紀的意義において「親方工匠」A Master Artizan であつた。彼はある親しい人に「親方工匠（マスタアアーチザン）――もしこの稱號を使ふことが出來れば」と書き送つてゐるが、(Ibid. p. 7) その稱號こそ彼に適はしいものであつた。

八

かう云ふ多忙な生活の間にあつて Morris の「赤い家」は連中の會合所であり、彼等はこゝで愉快な休日を送ることを常とした。彼等の一人は書いてゐる「赤い家で土曜日から月曜日までを過すことは如何に愉快であつたらう。Abbey Wood 停車場で下車して、青い空氣の香を嗅ぎながら、家まで三哩位搖られながら馬車を驅る。さうして吾々は自分の室にゐるやうな氣樂さを以て、美しい廣大なところに行く。そこには何等の抗論もなく、たゞお互に滿足してゐた許りであつた。吾々は幸福だつたので、笑ふ許りであつた」。(Mackail, Life, I. p. 165)

この平和と友愛とに充ちた「赤い家」で Morris 夫妻は二人の娘を生んだ。長女は千八百六十一年一月十八日に、次女の Mary は翌年三月二十五日に生れた。(次女の Mary Morris は Collected Works of William Morris 24 Vols. の編者である。)これ等の數年間は Mackail の云ふ如く、Morris にとつては全く滿足して過した數年間であつた。(Ibid. p. 166) 年然この滿足の數年間を送つた「赤い家」を遂には離れなければならない事件が起つた。それは千八百六十四年の九月に Morris 一家は Burne-Jones, Faulkner 一家とともに Littlehampton の海岸に行つたが、恰度この頃 Morris は London と Upton との間の旅行で雨に會ひ寒氣がしてから、僂麻質斯熱に掛つたことに歸因する。この結果彼は一時 Morris & Co. の業務を打ち捨てるか、「赤い家」から London に引き移るかの二途その一を選ばなければならなかつたが、遂に後者が選ばれて、「赤い家」は賣られ、さうして Morris は London の Bloomsbury に移つた。

千八百五十八年に刊行された "Defence of Guenevere and other poems" 以後數年間の靜寂な生活の間にあつて、Morris は、その詩想を養つた。さうして今やその養ひ得た詩想を發表する時期に達したのである。加之、Morris の London への歸來と、Morris & Co. の支配人として、藝術殊に音樂に熱心な、繪畫においては Rossetti 並に前ラハァエル派の熱心な讃美者で、才能もあり、人格も高い George Warrington Taylor を、千八百六十五年以後得たことは、彼に對して、多くの閑暇を與へた。この多くの閑暇が彼をして The idle singer of an empty day たらしめたのである。物語を語る本能は、始めから Morris にあつた。その文學的資質は Morris にあつて最も價値のあるものであつた。「彼はこの資質を以て、彼の特別の、さうして無比の天惠で、そは抒情詩的性質と結び付けて、一種の詩の形態に作ることが出來ると認めた。不思議のことには、英國の詩壇は詩の形態に富んではゐるが、この物語風の抒情詩においては、その最高の完成に達したことが極めて稀である。」(Mackail, Life, I. p. 183) 詩祖 Chaucer 以後において、物語風の詩は、Dryden 並に Keats の例外を除いては、第二流の詩人によつて、取扱はれたに過ぎない。Morris は今や、この點において Chaucer 以後の第一人者たらんとしてゐるのである。"Life and Death of Jason." (June, 1867) "Earthly Paradise." (1868—1870) の二著によつて Morris は英國詩壇において動かすべ

からざる地位を獲得した。"Earthly Paradise" の構想は雄大なものである。そは希臘神話を北歐の神話とを二大要石とし、之に配する歐洲並に東洋の神話を以てした。この長詩の構想は幾多の變遷を見、千八百六十六年には、Orphens and Eurydice, the Quest of the Golden Fleece, the Life of the half mythical Dorian chief, Aristomenes of Messene. 丈け作られてあつたが、この中 "The Quest of the Golden Fleece" は "Life and Death of Jason" の別題を以て千八百六十七年六月に刊行せられた。"Jason" の成功は、急速であつて、大であつた。此時代には、Tennyson は、絶對的に詩壇を支配してゐたとさであつた。けれども人々は、彼の模倣者に厭さ、さうして彼からも彼の讃美者の所謂彼の完成した精巧なる美しさと調和する何等の靈感を得ることがなくなつた。そは新しい詩の起るべき時代であつた。」(Mackail, Life. I. p. 189)その時に當つて希臘神話を題材とし、中世紀的詩作法によつて創作された "Life and Death of Jason" の出現したことは、詩壇の驚異であつた。

この成功に鼓舞されて、Morris は "Earthly Paradise" の完成に急いだのであつた。彼の勉強は恐るべきものである。一日の間に七百行の詩が作られたことさへあつた。さうして千八百六十七年の夏も終り、翌六十八年には二十四の物語の中十七まで完成された。さうしてその刊行となつたのである。發行者の Mr. F. S. Ellis は、Morris の友人で、彼が千八百八十五年その業を廢するまで、著者と發行者との關係が續けられた。この發行者によつて "Earthly Paradise" は、三卷(後に四卷)に分つて千八百六十八年から七十年に渉つて刊行せられた。

詩人としての Morris は、浪漫主義者であつた。「實に當時に於る浪漫主義運動は、浪漫主義的詩人の生活の狀態とその周圍に對する一般的不滿を表現したものであつた。……そは第十九世紀の全都會文明に對する一の反抗であつた。さうして浪漫主義的詩人は、現在の弊を認めるが故に、過去の中に彷徨したのであつた。」(A. Clutton-Brock, William Morris: His Work and Influence. p. 80.)「さうして、すべての浪漫主義的詩人の中で、Morris は、その初期の詩において最も浪漫的であつた。何となれば、彼は、何人よりも一層明白に彼の時代に不滿であつたからである。」(Clutton-Brock, p. 81)、彼はその詩風を Chaucer に倣らつた。「彼は詩を以て、一の技術と考へた。さうして物語の技術に熟達してしまつたので、そは彼にとつて容易のものであつた。彼は、その全心を之に傾倒することなくして、詩作することが出來た。」(Clutton-Brock, p. 91)

氷蘭の神話は最も Morris を動かしたものであつた。Morris はその工匠と詩人としての生活の間に、氷蘭語を學習し始めた。その時期は藝術家として Rossetti の影響を脱した時と同じである。彼は Magnússon の指導の下に氷蘭語を修得し始めた。その最初に讀んだのは Eyrbyggja Saga であつて、數ヶ月の間に、彼は可成の程度まで氷蘭語に熟達し、千八百六十九年の四月には、Morris は Magnússon と共に、Grettis Saga を飜譯刊行した。さうして更らに數冊の Saga を飜譯刊行してゐる。この結果として彼は千八百七十一年の夏氷蘭に旅行を企て、更らに三年後の七十三年に再び氷蘭を訪ふて諸々の Saga に出て來る地を歴訪し氷蘭に對する愛を深めた。この第一回の旅行中の日記は、Mackail, Life. I. pp. 249-268 に收められてゐる。

之より先き、Morris は美しい Kelmscott の Mauor House を得た。Kelmscott の家は London の家屋周旋人の表に、千八百七十一年の初めに登載されてあつた。Kelmscott は Oxford から水路三十哩で、Lechlade の町から三哩許りのところにあつた。さうしてそこは「地上の天國」で「南部英蘭の深に眼りと靜寂」との間にあつて、低い小山の間にある平地の牧場の間を、Thames の上流が流れてゐる平和と靜穩との地であつた。彼はこのところを、彼の Utopia を描いた News from No-where の末段に記してゐる。

彼はこの住み家にあつて、詩作と工藝とに從事した。彼の精力は絶倫であつた。彼は今や美しい本を作ることに興味を覺え、次には染色のことに沒頭した。彼は是等のことにおいて、生産（勞働）における喜悅を味はんとしたとともに、利潤を目的とする産業制度によつて、破壞せられた美を再び實現することに務めた。さうして彼はこのことを成し得たのである。

かくの如き詩と工藝美術の創造の生活にあつた Morris を苦惱せしめたことは、千八百六十四年の秋に起つた。それは Morris, Marshall, Faulkner & Co. の解散である。Morris & Co. が千八百六十一年に設立されたことは既に以前において說くところがあつた。この會社の資金と運營と新機軸とは、その殆んどすべてが、Morris のものであつた。Morris はこのために、一日の數時間を費し、さうして收入を得てゐた。その他の出資社員も會社の內容に對して發言權を持つてゐた。然るに他の出資社員はこの會社の事業に對し寄與するところがなかつたのに、彼等は同等の發言權と同等の利益分配權を持つてゐた。さうして利益は一二年以後は分配されなかつた。こゝに兩者の側において、會社の解散と改造とが必要となつたのである。Burne-Jones, Faulkner, Webb. の外の出資社員（彼等の出資額は各々二十磅である。）は彼等の權利を主張して讓らなかつた。乍然、長い交渉と計算との後にこの會社は遂に千八百七十五年三月に至つて解散した。さうして William Morris はこの會社の業務を受け繼いで、獨力を以て、經營することになつた。さうして名稱を Morris & Co. と改稱したのである。この結果 Morris と Rossetti との交遊は絶たれて互に離れることになつた。Morris と Rossetti との間に交遊の絶たれることは、この事ばかりが原因ではない。Morris は Rossetti 死後において、その書翰の中に彼を批評して次のやうに云つてゐるが、その當を得たものであらう。彼等は共にその性格が異つてゐた。これがこの最大の原因であつたらう。

Morris は云つてゐる。「私は何故 Rossetti が政治に興味を持たないかと云ふことを說明することは出來ない。……彼が個人的の事柄の外は何事も氣をつけない。それは勿論藝術並に文學に關連して。乍然、彼は心身に不幸のある人を助けるのに大邊骨を折る。けれども彼は民衆に對する害惡について考へることが出來ないのだ。要するに私は、公平に政治を觀察し得る希望に輝いた心を持つた人が必要であると考へる。さうして Rossetti は、恐らく希望に輝いた人ではなかつたのだ」と。（Clutton Brock. op. cit. p. 101.）

（未完）